2020年５月25日発行

うじがみ遺跡ニュース vol.3

長野県埋蔵文化財センター

◆ 村長さん 教育長さん 来跡

発掘作業もひと月が過ぎ、縄文時代や平安時代のさまざまな遺構・遺物がみつかっています。

５月に入って、発掘調査の委託者である朝日村の小林村長さんと百瀬教育長さんに御多忙の中、視察していただきました。次々に発見される村の新たな歴史を目の当たりにして、感激された様子でした。

◆ 遺跡に なぞの格子目模様と 丸いシミが

遺跡からは、現代人の生活痕跡がみつかることもしばしばあります。前回の遺跡ニュースでお伝えした黄色っぽい粘土質のローム層上面で遺構を検出していると、美しい格子目模様が現れました。長イモの作付け前に掘られたトレンチャーの跡です。しま模様の切り合い関係を観察すると、縦方向の東西溝（等高線に直交）が横方向の南北溝（等高線に平行）を切っているようです。なぜでしょう？

昭和 30 年代半ばから、この場所で長イモづくりしていた方に伺いました。最初は南北溝にしたけれど、溝に水が溜まってしまい具合が悪く、東西溝に変更したところ、水が流れて長イモの生育が良くなったのだそうです。

発掘調査では、いつも、「なぜ？」を発信してみることが大切です。ここでも、暮らしを豊かにする人間の創意工夫を学ぶことができました。

ローム層上面には、トレンチャーの筋以外に大小さまざまな黒っぽいシミがある　上方に見える半円形のシミは、裏面で紹介する竪穴建物跡

トレンチャー　黒く伸びたツノのような部分が回転し、溝状に土を掘ることができる【川辺農業産業株式会社HPより】

◆ 次から次へと縄文土器が出土

前ページ写真の黒っぽくみえるシミは、一旦、ローム層を掘り下げた穴に埋った土です。この土を取り除いてみると、縄文土器が次々と出土しました。土器はいずれも床より高い位置から出土しています。この集落で暮らしていた縄文人は、埋まりかけた竪穴建物跡のくぼみを不燃物の廃棄場所に利用していたようです。おかげで、この竪穴建物が縄文時代の中期中頃（約 5,300 年前）に放棄されたことがわかってきました。

投棄された道具類は、土器以外にも石鏃や打製石斧などの石器や、ミニチュア土器が含まれている

◆ 重なりあう竪穴建物跡

竪穴を床面まで掘り下げてみると、床の深さが奥と手前とで異なることがわかりました。どうやら、手前の竪穴建物は、奥の建物の床を壊して新たに造られたようです。

手前の竪穴建物の中央には、焼けた土の上を土器がおおっているようです。おそらく下から炉跡がみつかるでしょう。さらに、壁の内側には筋状のシミや円形のシミがあります。これは、床面に掘られた溝や柱穴が埋まったものと考えられます。床面は、手前が 50 ㎡ほど（約 31 畳）、奥は 20 ㎡ほど（約 12 畳）の広さと推定しています。

うじがみ遺跡ニュース　第３号（令和２年５月 25 日発行）
長野県埋蔵文化財センター　〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田 963－4
TEL 026-293-5926　HP：http://naganomaibun.or.jp/　Email: info@naganomaibun.or.jp
発掘現場：080-9560-1354　（ 担当：村井大海・平林　彰）